

- 社説
- 視点アジア



筆者自宅の窓から見えるチャオプラヤ川＝4日、タイ・バンコク

## **[分かち合う世界へ]40、非常事態下、減量に成功アジア自立 支援機構代表理事・小沼廣幸**

本稿を執筆した3月3日は桃の節句だ。梅の花が咲いたと日本の家族から連絡があったのは2週間ほど前のこと。世界中が新型コロナウイルス禍で大騒ぎをしていますが季節は忘れずに巡ってくる。

ここタイに住んでいると四季の移り変わりにはどうしても疎くなる。2カ月ほどの短い乾季が終わりに近づき、気温は最低でも25度、最高で35度近くになる毎日が続いている。冷房をつけないで寝ると、目覚めた時にジトツとした不快感に包まれて後悔する。朝起きた時に肌が冷えつくような早春の日本の、新鮮でピリツとした感覚が懐かしい。

夢のような1年が過ぎた。まるでホラー映画を見ているようだと友人が言う。近代文明の恩恵に浮かれ過ぎた人類に下された罰だという人もいる。しかし、自然界の現象の一つとして、われわれは冷静に捉えるべきだろう。100年前のスペイン風邪、50年前の香港風邪、

そして今回の新型コロナウイルスと50年周期説を立証するかのよう襲来した。

その半面、スペイン風邪が第1次世界大戦中の米国が生物兵器の一つとして開発中に事故で拡散したという説が、いまだにうわさから消えないでいる。そして新型コロナウイルスが中国の武漢で生物兵器の研究中に間違っ拡散したという説も根強く存在するから複雑だ。もしかしたら、人類が自分たちの犯したミスで自らを滅ぼす時が来るのかもしれない。

そんな話をしながら、昨晩は久しぶりにバンコク市内の居酒屋で友人たちと酒を飲んだ。何か月もの間、酒類の提供がレストランなどで禁止されていて、先週解禁されたばかり。それでもタイの非常事態宣言は3月末まで延長になった。最近、日本からバンコクに赴任した友人がホテルで2週間、自己隔離を強制されていた。ホテルから一歩も出られなかったのは理解できるが、ホテル内の売店にも行けず、完全な隔離状態だったとのことだ。毎日の新規感染者数がほぼ一桁のバンコクでさえ、こうした嚴重な感染防止措置が取られているのだから、レストランや居酒屋で酒を飲める日本はまだ緩いのかもしれない。

何もしないでおとなしくしているのは自分の性に合わないので、この機会に運動と減量をすることにした。

最近の新型ウイルス死者に関するニュースでは、肥満や太り過ぎの人が人口の半数以上を占める国は、その比率が4割以下の国と比べて死亡率が10倍高く、世界全体のおよそ250万人の死者のうち9割近い220万人が、こうした国々に集中しているという。要するに肥満の人は新型ウイルスで死亡する率が特別高いということなのだろう。

このニュースが直接のきっかけではないが、わが家から1・5キロほどの、チャオブラヤ川とお寺に隣接する朝市に歩いて買い物に行くのが日課になった。それに加えた食事制限などが功を奏してか、2カ月で10キロ、半年で20キロほどの減量に成功した。体が軽くなり健康状態も良好だ。後はリバウンドをしないように、と自分に言い聞かせている。

<こぬま・ひろゆき> 1953年、東京都生まれ。明治大卒。筑波大大学院博士課程前期修了。博士（農学）。元国連食糧農業機関（FAO）事務局長補兼アジア太平洋局長。2017年にタイ王冠勲章を受章。18年、一般社団法人（非営利）アジア自立支援機構を設立。両親、妻は本県出身。茨城県、バンコク在住。